

優秀賞

初めての運動会

鹿児島県 霧島市立国分南小学校五年 西牟田 琥羽

ぼくは、一年生の夏休みが終わってから、教室に入ることができなくなった。クラスの中にいるとむねがどきどきして苦しくなってしまう、不安でいっぱいになったからだ。それからずっと保健室や支えん学級で勉強をしてきた。給食もみんなといっしょに食べることはできない。ろう下から聞こえる笑い声を聞くと、楽しそうだなと思う気持ちと、自分には無理だという気持ちが混ざっていて、さみしく感じた。

五年生になってから、少しずつ変化があった。仲のいい友達がいって、その子が、「いっしょに教室においでよ。」と声をかけてくれるようになったのだ。何度もさそってもらったことで、「やってみよう」という気持ちが大きくなり、ついに教室のドアを開けることができた。自分の足で教室に入れたことがすごくうれしくて、「できた」という気持ちでむねがいっぱい

になった。

まだ全部の授業を教室で受けることができていない。特に体育は、みんなといっしょに運動する勇気が出ず、まだ出られなかった。だから、今年の運動会の種目「台風の目」の練習にも参加できなかった。練習をしていない自分にできるのか不安でいっぱいだった。でも友達が、

「大じょうぶだよ。いっしょにやろう。」

と言ってくれたので、本番に出てみることを決めた。台風の目は、四人一組で長いぼうを持ち、トラックを走る競技だ。カーブではぼうをたおさないように力を合わせなければいけない。練習をしていないぼくには、とても難しく思えた。それでも思い切って参加した。

当日、入場門に立つと、足がたがたふるえた。むねはどきどきして、にげ出したい気持ちもあった。でも、もうやるしかないと思い、スタートラインに

立った。ピストルが鳴ると、いっせいに走り出した。友達の手が速くて、ぼくは追いつくのに必死だった。長いぼうは思ったよりも重く、カーブでターンをするときは、きん張で体がたかくなり、うまく力が入れられなかった。それでも転ばないように、ぼうを落とさないようにと必死で走り続けた。観客席からの「がんばれ」という声えんが聞こえて、少し勇気がわいてきた。ゴールしたしゅん間、「やった」という気持ちがあふれ出した。練習ができなくても、思い切ってちょう戦すればできるんだと感じた。台風の目が終わったとき、むねの中がじんわり温かくなり、「参加してよかった」と心から思った。ぼくにとって今年の運動会は、特別な一日になった。五年間で初めて参加できたこと、勇気を出してちょう戦できたこと、そして、自分の力で一歩ふみ出すことができたこと、大切なことをたくさん学んだ。

